

性格特性及び「あがり」の原因帰属が「あがり」経験に及ぼす影響

○加藤和奏¹・小野史典²

(¹山口大学大学院教育学研究科, ²山口大学教育学部)

目的

我々は様々な場面において「あがり」を経験する。「あがり」により本来の力を発揮することができず、期待した結果を得られない可能性がある。木村他(2008)はスポーツにおいて、性格特性である「情緒安定性」や「外向性」は「あがり」原因帰属である「失敗不安」「他者への意識」「性格の弱さ」に影響を及ぼすことを示している。

それでは性格特性や原因帰属の違いが、実際の「あがり」に違いを生じさせているのだろうか。本研究では、性格特性と「あがり」原因帰属が影響を与える要因として「あがり経験」に着目する。演奏者において、性格特性が「認知機能・感情状態の変化」という「あがり」経験に影響を与える(平山, 2017)ことや、教育実習において「失敗・責任不安」「生徒意識」などの原因帰属があがりやすさに影響を及ぼす(城, 2013)ことから性格特性と原因帰属は「あがり」経験に影響を及ぼすと考えられる。「あがり」経験に焦点を当て、個人のメカニズムに合わせて対策を行うことで「あがり」が軽減し、パフォーマンス向上に繋がる手がかりが得られると考える。

以上を踏まえて、本研究は面接場面において性格特性および「あがり」原因帰属が「あがり」経験に与える影響を検討することを目的とする。

方法

参加者 本研究にはオンライン調査会社に登録するモニタが参加し、114名(男性52名, 女性60名, 回答しない=2, $M=43.06$, $SD=14.10$)を分析対象とした。

測定内容 性格特性に関する質問項目は村上・村上(1997)の主要5因子性格検査から「あがり」原因帰属に関連があった「情緒安定性」「外向性」の合計24項目を用いた(木村他, 2008)。「あがり」原因に関する質問項目は「あがり」の原因(有光, 2001)及び「あがり」の原因に関する質問項目(金本・横澤, 2003)より、木村他(2008)で「情緒安定性」と「外向性」に関連があった「失

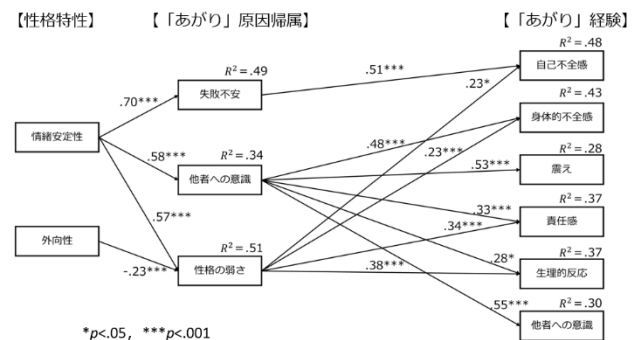
敗不安」「他者への意識」「性格の弱さ」の合計15項目を用いた。「あがり」経験に関する質問項目は「あがり」経験の特徴質問紙(有光・今田, 1999)より、本研究に関連すると考えられる38項目を用いた。

手続き 参加者に1年以内で最もあがった面接場面を想起してもらい、あがった状況(入学試験や就職活動など)、「あがり」原因に関する質問項目、「あがり」経験に関する質問項目、性格特性に関する質問項目に回答を求めた。

結果と考察

性格特性および「あがり」原因帰属が「あがり」経験に与える影響を検討するために、各測定内容の平均値を顕在変数として共分散構造分析を行った。その結果、 $GFI=.94$, $AGFI=.83$, $CFI=.98$, $PCFI=.39$, $RMSEA=.08$ であった。Figure1から面接状況においても木村他(2008)と同様に性格特性が「あがり」原因帰属に影響を及ぼすこと、また「あがり」経験に性格特性と「あがり」原因帰属が影響を及ぼすことが明らかになった。本研究の結果を踏まえて、「あがり」経験を軽減するために、個人の性格特性や原因帰属傾向に合わせた対策方法を検討することが望まれる。

Figure 1 「あがり」経験への影響の共分散構造分析



参考文献 (主要なもののみ)

木村展久, 村山孝之, 田中美史, 関矢寛史 (2008). 広島大学大学院 総合科学研究科紀要 人間科学研究, 3(1), 9.